

# 愛知の博物館

No.33



明治初期復元家屋

当資料館の目玉は、明治初期の復元家屋です。200年前のスス竹を使い、カヤぶき専門職や宮大工により忠実に再現しました。屋内には、時代考証をふまえて製作された針仕事や繩ないをする人形が置かれ、当時のままのふん囲気をかもしだしています。また、ボタンひとつで市内の文化財や古窯の位置がわかる立体地図は、子供たちの人気を集めています。1階は常設で、養蚕用具コーナー、農機具コーナー・運搬用具コーナー等展示。2階は、生活用具、古窯出土品、文化史説明パネル等展示、この他に2ヶ月に一度展示替えをしています。

(大府市歴史民俗資料館主事 伊藤 邦英)

## 目 次

- 「物の見せ方について、概要と展望」……………海老沢立志 ……2
- 「物の見せ方」……………三輪 克 ……3
- 「物の見せ方」……………桑山泰幸 ……4
- 「物の見せ方」……………浅井紀子 ……5
- 「現代博物館の資料と展示の意義」……………国友俊太郎 ……6
- 「愛博協研修会に参加して」……………藤澤良祐 ……8
- 「愛知県博物館協会への提案」……………岩田正人 ……9

# 「物の見せ方」について、概要と展望

海老沢 立志

## 1. テーマについて

今回のテーマを決めるに当たり、「展示について」としないで敢えて「物の見せ方」としたのには理由がある。

従来、展示という言葉には所謂博物館学の諸先輩の、将



来性に於て実りの少ない理論づけが行われて來た。例えば、陳列は「もの」(博物館資料、以下同じ)をただ平列的に並べるだけであるが、そこに学芸員の意識が加えられ、思想を持たせ、資料により見る人を説得させるようにするコミュニケーションの1形態が展示である言々。という式の論法がそれである。しかしそのような思考方法で各部面がまとめられた博物館では、人々に感動を与え、1度だけでなく2度、3度と博物館へ行こうと思わせるような、魅力ある博物館にすることはできない。展示には理論と技術の2つの問題が考えられる。展示技術面は、実際に即して語られるべきもので、美術館から水族館まで各種の館に共通な技術面の問題は、それぞれの各館に特有な問題に比して多くはない。

各館の事例報告的な発表が、従来の研究会等に於て多かったのは、上記の結果出て來るのであるが、それらは聞いている側にとっては、あくまでも他所の事であり、自分自身の問題として真剣に取り組める共通の話題は少ない。

また展示という言葉の従来の使われ方からは、展示室内での資料の見せ方の問題と考えられ易い。しかし、より良い展示を考える場合、もっと広い観点から問題を見つめたい。展示室内では「もの」を見せるのが主であるが、それを補い、より効果を上げ、正しく見せるために、展示室内だけで解決しようとすると、解説文の長いパネルや、どれが本来見せたい「もの」で、どれがその理解を手助けするものかわからなくなったり、どれがレプリカでどれが本物かわからなくさせてしまうような、従来の感動の少ない展示になってしまふのであり、展示を考える場合、展示室外でもなすべきことが多々ある。ビジターセンター等で「もの」の見方をまず教えること、講演会、講座の開催、図録、説明書の発行等々も展示効果を上げるために活用する必要がある。

「展示室内の展示の理論と技術」と狭義に考えるのではなく、1度行ったら2度と行く必要がないと思われる博物館ではなく、魅力あふれる博物館、従って入館者も増えつづけるような博物館をめざし、その活動の中で、博物館と入館者との接点になる展示というテーマを、広い視点から考えていいきたい。また、そうすれば異なる館種の学芸員にも共通の話題が少なくない筈であるということから、敢えて「物の見せ方」という表現にした。

## 2. 経過と概要

4名のレポーターに話題提供をお願いした。

桑山泰幸氏は、私立美術館の立場から、桑山美術館の実例に即して、展示に対する考え方を説明。入館者の1人1人に話しかけ、対話を通じて接するようにしている等、魅力づくりの方法は興味深かった。

三輪克氏は、展示というテーマを各種博物館に共通の問題として提示。また理工学系博物館の魅力づくりの努力を、名古屋科学館の実例から説明。

浅井紀子氏は、知多市民俗資料館での民俗資料の織機を実際に使用しての機織り教室、また染色教室の実例を説明。資料の使用、体験を通じての展示普及の利点、また資料収集時の寄贈者や古老からの道具に関する使用方や思い出話の聞き取り調査とその記録等々、学芸員の調査研究に対する取り組み方を述べられた。

引き続き、今回特に東京から来ていただいた国友俊太郎氏のお話をうかがった。予定時分をはるかに超える1時間の話題提供であったが、真正面から展示に取り組み、実例を縦横に示しての話に、日頃各人が断片的には考えていた問題の数々を明示指摘され、理論的にまとめていただいた感がした。ただ時間が少なかったため、多数の事例が述べられただけで、国友氏の展示理論と氏が手がけられた実際の展示例とのつながりにまで話が進まなかつたので、国友理論を充分には消化し切れなかつた。

熱田神宮宝物館の山田蓉氏の御神宝の展示の仕方にについての質問は、国友理論に迫まる格好の事例であったが、充分話し合う時間が無くなってしまい、かみ合わないまま時間切れで終了した。

## 3.まとめと今後の見通し

国友俊太郎著「現代博物館の展示活動——基礎理論編」は展示に対する大変良くまとまった考え方である。氏の発表内容を理論的に補うため、一部抜萃、紹介し、併せて研修会全体のまとめに代えたい。

(1) 博物館の機能は資料の収集・保管、調査・研究、

展示・普及といわれているが、一定の目的行為の中で統一され組織された機能としての役割を持つものでなければならないが、中でも重要なのは「資料の展示」を『媒介』とする利用者大衆に対する普及活動である。

- (2) 展示理論は展示の実際経験を土台として生れるものであり、展示活動の実践こそが基礎である。
- (3) 展示の中心問題は、「ものに語らせる」という姿勢をはっきりさせることにある。「もの」は見る人の感覚を通して語りかける。
- (4) 展示は本来展示物による感性への働きかけである。解説文等文章による場合は理性への働きかけであり、本質的に矛盾する事柄である。
- (5) 博物館での調査・研究は学問自体の向上を目的とするようなものでなく、展示活動を前提としての研究なのであり、資料の展示を通じて大衆に普及するという目的意識をはっきりともったものでなければならぬ。大学や研究所における研究とは異なっている。
- (6) 展示活動の内容は2つに区分出来る。オ1には展示構想・展示計画であり展示活動の前半分である。オ2に展示方法・展示技術の問題であり、これが後の半分である。オ1、オ2の性質は異なっていることを理解する必要がある。
- (7) 資料には多面性がある。外部の側面とは造型的側面であり、これが美的・芸術的性質を与える要素である。同時に「もの」のもつ無形の内容とは、「もの」の歴史性、社会性、思想性、経済性、物理性などを意味している。
- (8) 展示活動の本質は「ものに語らせる」ことであり、見る人と「もの」との自由な対話条件を如何に作り出すかという展示方法、展示技術問題なのである。展示そのものは如何にして印象を与え、感覚させ、感性的に知らせうるかという技術問題に他ならない。又展示自体は仕事であって学問ではない。
- (9) 展示活動を行うに当たって学芸員にとってオ1に大切なのは内容である。或る一つのテーマについて展示企画をする場合、観客は何を見たがっているのか、何を見せるべきか、何を知りたがっているのか、では何を見せるべきか……だからこのような内容と構成にしようということがその出発点であり、発想方法となる。（展示構想、展示計画）  
次にかれらにはどのような言葉がよいのか、どのような色や形や形象化が受け入れられるのかということになる。（展示方法、展示技術）

他に展示活動の対象者としての観客、利用者の研究等も旨趣に富んでいるが、省略する。

「物の見せ方」は博物館活動の特に中心になるテーマであり、今回の内容をふまえて、今後も機会ある毎に研究会等で取り上げ検討を深めて行きたい。

（博物館明治村学芸課長）



## 「物の見せ方」

三輪 克

博物館展示における物すなわち展示品を、観覧者にどのように見せるかは、従来から博物館における重要課題の一つであり、種々の理論、方法が提案されている。しかし、どの博物館にも適用できるような理論、方法は未だ見出されていないといつても過言ではない。



ただ、理工学、自然史、歴史、美術というような博物館の対象とする分野が同一の場合は、経験的に類似した見せ方を用いていることが多い。

種々の博物館の中でも、いわゆる理工学博物館では、対象とする分野における原理や成果を見せるに主眼をおいている館がほとんどであるため、展示品の見せ方にについての研究と実験例が豊富にある。

第一にあげられるのが、物そのものが稀有であり、絶対的価値が極めて高い場合がある。この場合は、いわゆる目玉展示品として誇示されるが、一般に理工学

展示では例が少ない。第二にあげられるのが、物についての絶対的価値は、必ずしも高くないが、物の機能そのものが、展示品として必要な機能に完全に一致している場合である。この事例は理工学展示には割合多く見受けられ、いわゆる可動展示品として重用される。

現代の科学技術は日進月歩であり、その先端分野を物によってのみ紹介することは、大変魅力的ではあるが、非常な困難を伴うことが多い。このため、説明文、写真、映像機器を多く利用している。しかし、これら手段の多用も、一歩誤ると、展示の困難さからの逃避になってしまうことがある。

理工学の展示は、つきつめれば、情報伝達における一つの手段ということもできる。そうであれば、文字や映像とともに、情報量の違いはあるものの、展示において、時には物と同等の役割を果たすことがある。

そこで、これら手段の特質を生かした利用が、物の見せ方にとって重要になる。

物の絶対的価値だけで見せること以外に、何らかの方法により、その相対的価値を高めることにより、物を見せるることは当然に考えられることである。物の相対的価値を高める方法として最も容易に採用できることは、物の置かれた環境を改良し、物が有する情報を最大限に引き出し得るような条件を作ることである。

この場合、環境は、単に物を包含する直接の空間だけでなく、もっと広い空間をも含む。すなわち、展示は、展示室内だけで終始するのではなく、その博物館敷地の入口に立ったときから始まるともいえる。

従来から、理工学館において、この展示を包含する環境の役割についてはあまり重視していなくて、どちらかといえば、狭い空間だけでの環境を考えてきた。しかし、こうした環境での展示では、予測できる範囲での情報を伝達できるだけのようである。

ここまでつきつけてみると、理工学展示では、展示は、情報伝達の一形態にすぎないという考え方を進めてきたが、実際には、このような考え方で撤して企画された展示は、主張が明晰ではあるが、深味というか奥行を感じさせないものになり勝ちである。このような結果を生む原因として考えられることは、展示品を企画するに際して、理性に訴えることのみを追求して、感性に働きかける要素を軽視したことである。

理工学展示といえば、もっぱら科学技術の理論や成果を紹介することを目的としているので、感性の介入する余地がほとんど無いと考えられているが、実際には、最も理性的ともいえる数学分野の展示においてす

ら、感性にも働きかける展示が多くある。

以上、理工学展示においても、感性に対応できることが望ましいと述べたが、簡単に言えば、理工学展示も美しくなければならないということである。

(市立名古屋科学館学芸係長)



### 「物の見せ方」

桑山 泰幸



桑山美術館は、絵画・茶道具・美術工芸品を鑑賞、研究に供し、茶席利用とあわせて地域文化交流をはかることを基本として昨年4月に開館いたしました。桑山美術館の物の見せ方につきまして説明させていただきます。まず展示状況ですが当館は展示室が1階2階にございまして、2つの展示室は空調設備を設え、また湿度も展示品によって最適湿度になるよう調節しております。照明は蛍光燈とスポットライトを併用し、展示品保護の為少し照度を落としており、調光装置も完備しております。

次に館内の動線です。まず1階展示室に入りますと展示室をコの字型にウォールケースがあり、広くとった中央部には移動展示ケースを中心にソファーを並べ、座ってじっくり鑑賞していただけるようにしてございます。その為展示品の高さ、位置が調節されています。

展示品をご覧いただいた後ホールに出ます。ここは参考図書コーナーがあり、美術画集・陶磁器・茶道具関係の本がございます。展示品をご覧いただき更に深くご研究したい方は自由に御覧いただけます。

2階展示室は、ギャラリー的要素をも備え、茶室「望浪閣」があり、この茶室では季節に合った茶道具を飾り、ご希望のお方には抹茶をお出ししております。尚

館内には静かな琴のしらべの音楽を流して優雅な雰囲気を出しております。

更に屋上に上がっていただきまると、高台にある当館からは名古屋市街の四季折々の景色が一望に楽しめ、遠くは伊吹、御獄の山々が眺められます。屋上の一角落庭園を設け、野点席として利用できるようになっております。

館内を一廻した後、庭園内的一角に茶席「青山」があります。この席は四疊半中板の席中に阿部誠作の利久像が安置しております。「望浪閣」・「青山」を利用していただく方にはご希望により当館備え付けの道具をお使いいただき、少しでも皆様方のお役に立つよう努力しております。

以上が当館の展示状況並びに全容です。

次に当館の展示方法について説明いたします。

桑山美術館では、所蔵品中、絵画・茶道具を中心に、テーマをもうけ展示を行なっております。展示品を中心として学芸員が調査研究を行ない、更に教育効果等美的享受を補うべく展示解説をいたしております。展示室内は、できるだけパネル、写真等の資料は飾らず、教育的展示の重要な部分は「もの」と「ひと」との結びつけを、展示品そのものにさせる方法にあるのではないかでしょうか。その「もの」と「ひと」との媒介になる重要な部分が学芸員の本質的な活動と言えます。

その為、当館は出来る限り鑑観者にじかに接し、わかりやすい言葉で解説をいたしております。

最後に現代の美術館での展示理論につきまして少しだけ述べさせていただきます。

美術館の性格として、伝統的な価値の保管が第一であると思いますが、創造的な企画をし、現代美術の大きな流れの中から生れつつあるものをとり出し、企画展にして打ち出すと言う側面も忘れてはならないことだと思います。そこからみちびきだされる展示方法として、①. 調査、研究に基づいて収集された美術作品を収集品として展示する。②. すでに発表された論文などに基づいて展示する。③. 未発表の問題を学芸員が研究し展示の形式で発表する。④. 美術史に基づいた展示をする。⑤. 地域美術史の展示をする。

以上5点があげられます。勿論、これらすべて一館で活動することはむずかしく、そこで、文化施設の機能分担がここに必要になってきましょう。各文化施設間のネットワークが前提としてあることは言うまでもありません。これは単に美術館だけでなく、歴史博物館、各郷土資料館の美術分野とも協議できるのが理想とされます。美術館の展示、つまりは活動を行なって

行くには、ソフトウェアの面にも力を入れなくてはならないと思います。

以上、まだ一年たらずの美術館の運営で何もわかりませんがご報告させていただきました。

今後ご専門の先生方よりご指導ご批判をいただき、更に勉強して行きたいと思っておりますので宜しくお願い申し上げます。

(桑山美術館事務長)



## 「物の見せ方」

浅井 紀子

物の見せ方には、物を並べておいて見せる方法とか、道具を動かして道具そのものを見せる方法などがあります。

生活資料といわれる民俗資料は、その道具の使い方もまた展示の中で見せるべきものでありますが、普段はそれをなかなか見せることができません。そこで機織教室や体験教室を行ない、その中で道具そのものを見せるという方法をとっています。

道具は動かしてはじめて道具であり、展示しておくだけでは道具ではない、道具としては生きていないと考えていますので、見せる方法として、各種教室を開催し、道具の使い方を通して道具そのものを見せていく。

### 1. 展示資料と学習活動

現在、資料館で展示資料を使用して行なっている学習活動に「機織教室」があります。

この教室は昭和54年度から始まり、現在4年目を向けています。この教室の基盤として古い資料館での活動があり、そこで道具を使って昔ながらの機織を確実



に学んできました。

この教室を開催した目的は

- ① 知多木綿の生産地であったこと、親から子へと受け継がれた機織の技術が失われてしまうという危険があること、
- ② 知多木綿の生産資料が、県の有形民俗文化財に指定され、指定品以外にも多数の資料が収蔵されていること、
- ③ 道具は動かして始めて道具であり、ただ単に展示しておくだけでは、道具は生きられないと考えること、
- ④ 道具の使い方は学芸職にたずさわる少数の者だけが受け継いでも、いずれ消えてしまうので、少しでも多くの人に知ってもらいたいと考えるから。

以上のような点をふまえて教室を開催してみました。

展示資料や文化財を使って教室を開催することは、文化財保護の立場から言えば、「それはまずい」とお叱りを受けるかもしれません、道具を使用することにより、虫害が防げ、最初虫のいた道具も動かしているうちに虫がいなくなり、保存状態もいいようです。

また、使用するためには、修理をしなければならず、収蔵庫にしまっておくだけでは補修されない道具も直すことができ、一石二鳥だと思います。

### 2. 体験教育と民俗資料

現在、いろいろな体験教室を、収集した民俗資料を使って行なっています。

綿を栽培して「綿織り機」を使い綿の種取りを行なったり、麦を栽培して、脱穀からうどん作りまで、各種の道具を使用して作業を行ない、道具とその使い方と先人の知恵もいっしょに学んでいます。

物だけを集めるのではなく、道具の使い方も残すのが大切なことですので、体験教室を行なうことにより、道具の使い方を学ぶことができます。また、収集した資料を収蔵庫に眠らせるのではなく、教室を開催することによって補修をし、人々の目に触れ、手に触れ、そして道具そのものを見せることができます。

生活資料として今まで人々の生活に密着していた道具の類が、時代の流れにより使われなくなり、単に民俗資料として収蔵庫に収蔵されるだけになってきていますので、体験教室を通して、道具と道具の使い方を少しでも多くの人に伝えられたらと思います。

### 3.まとめ

民俗資料をあつかう資料館として道具を使い、道具そのものを見せるという方法は、科学館などで原理を見せるのとは違うと思いますが、物の見せ方としてこういう方法もあってもいいのではと考えています。

しかし、こうしたことでも後数年すれば使用方法も失われてしまうかもしれません。

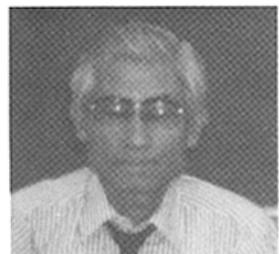
今後どのように道具そのものを見せるのか、技術を保存することができるのかが、こここの課題だと思われます。

(知多市民俗資料館 書記)



### 現代博物館の資料と展示の意義

国友 俊太郎



よく皆様は「博物館学の講座」などに接せられるし色々な意味の博物館に関する本に接せられる事と思います。もちろん私も、ほとんどのものに目を通しました。しかしながら、今までのものに対しての考え方といいますか、発想方法といいますか、そういうものが私の場合には根本的な違いがあると考えています。したがって結論が違います。どっちが良いのか悪いのかというと“仕事で見てくれ”と言うのが私の意見で、仕事で見ていただいてどちらが役立っているか、どちらが良かったか、どちらが効果があったか、どちらが利用されているか、どちらが…という事で分けてもらえば良いと思います。但しその実際の仕事はなかなか私の言う通り実施させてくれませんし、予算的な面からいっても、また色々な専門家の意見も多く入って来ますし、だいぶそれと喧嘩しながら、どんどんどんどん反省していくのでございますけれども、なかなかうまくいきません。しかし最近ではだんだんとある部分については、あるいは一定の問題については意見が通って来ましたので面白くなつて來たと言えばなつて來たし、これからだと言えばこれからだと思います。さて、ではどこが今までの博物館学者だとか、あるいは博物館学芸員であるとかいう人と発想が違うかというと、私の方は研究室や図書館へ行き来し、作り上げ考えたりした問題提起でなくて、20数年間にわたって700前後の展覧会を身をもって実行して來た。そしてどのパネル屋はどういうパネルを作り、写植屋やアクリル屋・大工・ガラス屋・ケース屋とはどういうふうに結合されるのか、デザイナーとの関係はどうなのか、監修者との関係はどうなのか、新聞社はどの様に介入するのか、東博や京博の学芸員、あるいはその事務関係の人はどの様に関与するのか、費用はどの様になっているのか、予算はどうなのか、輸送はどうなのか、科学保存の問題はどう解決するのか、そして又

私的な所有物と公的な所有物との関係をどのように考えて行くのか、さらに解説が（物の意味をわからせるということが）どういう事なのか、どういう結果を生むのか、どういう方法が良いのか、色はどうなのか、光はどうなのか、総べてそういう事を博物館の利用者から、悪く言われたり、良く言われたりしながら来た体験の中で、一つの体系づけた意見を持つようになり、これから博物館がこういうふうに行くべきではないだろうかと言う意見を持つようになったと言うことが、私なりの姿でございます。さて、具体的な内容から言いますと、例えば皆様が話された例を一つ挙げてみますと今浅井さんが話された機織のことにつきまして、道具は扱う時に道具たりうるのだと言う意見がありました。これは歴史民俗資料館にとったらすばらしい意見だと思います。茶道の茶碗というものが、色々なとりそろえられた諸道具の中で、人々がそこに動作をして茶と言う一つの行為が実行されて、そこに茶碗が茶碗として成立している。それ以外は茶碗であろうか、何か物を入れる器であろうか、何か花を活けるものなのでであろうか、水を入れるものか、油を入れるものか、あるいは子供の玩具なのか、これは実際には色々ある訳です。なぜならば一つの物というものは、美術的側面だけを持っているものだけでなく、歴史的側面、社会的側面、あるいは理工学的側面、民俗学的側面、色々な側面（又は風性）を持っている訳です。だからこそ一つの刀剣は美術館に美術刀剣として展示される事もできるし、あるいは戦いの武器として歴史資料館に展示する事もできるし、製作過程として理工系の博物館に展示する事もできる。そういう事は当たり前の事なのです。良いものは美術館へ行き、悪いものは民俗資料館へ行くと言う事はちょっとおかしいのです。ところが、ものについてはもう一つの問題があり、例えば、機織機はこの地方では、10数年前まで、あるいはそれ以前では娘さんは畑仕事から織物の仕事から一式をやらなければ嫁には行けないと言う時代を経て、そして婚しては畑仕事を手伝いながら、一家の事を切りもりしながら、子供を育てながら、そして機を織って行く。こういうような中で生み出されて行く何十年間の経験の中で出て来た生活の思い、あるいは、家族や労働に対する色々な希望や願い、又は苦しみや悲しみ、こういう人間的な側面というものが物には全部意味づけられているという事です。こういうものが資料の内容を構成しているという事をどうしても発見願いたい。美術系の博物館・民俗系・歴史系・理工系・自然史系色々ありますが、同じものでもこの資料で何を言いたいのかという意味が違って来る。だけど資料そのものはどういう性質を持っているのであるかと言う事を、資料自体の持つ意味というものを徹底的に研究してみなければなりません。これが学芸員の持つ一番最初の仕事だらうと思います。それをただ単に、物自体とし

て研究するというような事をすると、これは一側面しか理解することができないのです。学芸員の展示活動についていえば、例えば機織仕事の展示においては、見せるだけでなく、他の人に織ってもらう（実演してもらう）そしてお婆ちゃんが娘時代から現在に至るまで持ち続けた生活そのものを話してもらう。一人の農村婦人の歴史を話してもらう。そして機織技術習練の腕前を見せてもらう。そうすると、織り上った織物がどういった意味を持っていたか、どういう人の心がしみ込んでいるのかが良く理解できると思うのです。そういうことが、歴史民俗資料館や、最近できてきた公の資料館に、今最も必要なことだらうと思います。

資料館や博物館の持つ社会的役割というものが、利用者にとって今日ある自分がどういう事でできたのか、どういう人々の功績でできたのか、どんなに多くの人々の涙や、喜びや、知恵などで今日に成了のか、それを受け継いでいるこの人々の得た教訓を、どのように活かして行こうかと言うところまで考えてゆかなければ、公の評価の意味は無いだらうと思うのです。美術館に於ても、理工系の博物館に於ても、私は同じだらうと思う。例えば、最近できていく公の資料館の中にも、二つの形態があるが、例えば元来地場産業を基盤とした岡谷の歴史資料館は、その発生から、現在に至るまでの発展・歴史をここに納めてある。物（展示資料）があり、当時の資料の体験を話す人も居り、仕事や生活の苦しさや喜びを聞くことができる。そうすると、理屈ではなく、岡谷人としての自覚をおぼえ、教訓を得て、今日の岡谷の繁栄、明日への岡谷の期待を想い、一定の歴史観、価値観を身につけることが出来ると思うのです。これは学校教育の本による講義と異なり、感情で知っていくとか、体で知って行くとか、物で知って行くとか、体験で理解して行くとかということであって、これが博物館の社会的役割・地位ではないでしょうか。

さて、そうすると学芸員はどういう事ができるだらうか。

私は、民俗博物館で農家より資料を出してもらったら、農家の人は臨時の講師になってもらうのがよいと思うのです。自分の農具を使って話しをしてもらう。そして、その道具の使い方を教えてもらう。酒屋さんは酒屋さんの物を、鍛冶屋さんは鍛冶屋さんの物を借りて来れば、そこに働いていた人々は講師であり、学芸員にはそれを詳しく記録してもらい、次の若い人に教えてもらう。でなければ、今の学校の先生は、土窯で米を炊く事を教える事はできない。だけど、学芸員はそれを体で覚え、教える事ができなければ、学芸員の研究とはいいえないと思います。それと同時に他方面では、縦のつながりとして、民俗学的な、あるいは、歴史学的な諸問題を体系的に理論的に位置づけられなければまたすぐれた学芸員とはいえません。このこと

は別な言葉でいえば研究活動と普及活動の矛盾ともいえます。この問題を解決する方法が無いのかと言うと、解決する方法はあると思います。私は、今日ボランティア活動が普及しつつある状況で、どうして博物館が解り安い言葉で話したり、質問に答えたり簡単な理解、導きをする解説員を設置しないのか、不思議にさえ思っています。

この様な例は、諸外国にいくらでもある訳です。アメリカでは、博物館teacherと言う者が、すでに公然と存在しており、学校の先生と同じ地位と、同じ給与と、同じ条件を保持しています。我国でも、すでに行なっている所もある。この博物館teacher的な人は、常に入館者と肩で触れ合い、話し合う必要があり、訓練すれば必ずやれると思う。

今日の博物館は実物資料にふれてものを知り、理解していくという意義と、理性的に一般的教養を得る意義と同時に、娛樂的であり、リエクレーション的意義をもっているという解釈がほしいものです。

もう一つの問題提起は、展示活動という事が、今まで展示室だけで解決しようとしていた点に大きな誤りがあると考えます。普及活動イコール展示活動という考えに誤りがあります。今日歴史系の博物館の多くは実物資料が少なく、解説があり、写真があり、ジオラマがあり、レプリカがあり、やたらとこの様な物でうずまっている。最近の大きな博物館では、1mあたり30万円以上と言う展示費がかかっている。総展示費が8億円と言う例も聞く。この様に金をつぎ込んで何をやっているのか、物を見せるのになぜこの様に金がいるのか、ようするに展示する物が無いと言う事です。博物館にとって、資料が生命という意味がある。則ち、館と資料と人です。これだけあれば博物館として成り立つが、人も少ない、物が先づ無い。ただし、物が無いと言う事は、どういう事かと言うと、私は現代博物館に限って言っている訳ですが、（公立の博物館法を根拠にしてできた博物館を言っている訳です）。一方、物がある博物館があります。私立博物館です。どういう事かと言うと、神社・仏閣が先づ挙げられます。千数百年来或いは何百年来手持ちの資料であり、自分の資料であり、自分で使う物である。その次に旧大名家と豪商が保持していたものが、少し残っている。その後資産家が、その好みに合わせ、蒐集したものが、現在法人の博物館として所持して居り、代表的文化財はまさにここに集中して居ます。公立の博物館では、その一割にも充たないのが現状であります。

先の岡谷系統の町の歴史が生んだ博物館は別にして、今日乱立している、行政サイドの博物館は、物がないのに建設されるからジオラマ、写真、解説等が、ベタベタと出現することになります。実物と実物で無い物を同一に列べて資料館に物がある様に見せる事が、正しからしく無いか、それで人に感銘を与える事ができ

るかどうか考えてほしいと思います。

広島の原爆資料館の被害者の衣服とマネキン人形に着せたつくりものの防空服との間には共通した意味はないのです。それは全く性質の異なる資料であることを見はっきりさせなければなりません。

現代博物館の普及活動は資料の展示に限定されたものではなく、各種の解説活動や体験実習活動と結合されなければなりません。展示活動はその中心部分ではありますが、ものをみせることとその意味を解らせるこことを混同すると正しい展示活動にはならないと思います。

私は常々説明文は全部取って下さい、何もいりませんよと言っている者です。これは少々極端な方ですが、展示の主要な問題は、先づものを感覚させると言う事に主要な意味があります。何回もものに接していると、次第にその良さや意味が直感的にわかるようになるものです。だから美術的価値の高い、しかも歴史価値の高いものであればなおさらです。美術的価値の高いものであれば、美しさを、歴史的価値の高いものであれば、その歴史を、人々は直感的にとらえる事が出来、次にそれぞれ、その物の他のいろいろな側面を見るようになり、他の物との連係やその内部の性質と言うものを理解出来るようになったり、知りたいと願うようになるのではないでしょうか。そしてこのような過程の中で解説的効果（映像、説明文、図書等…）の積極的役割が実現するのであります。今日では観る方の人々は、あらゆる知識と知性を持っている訳ですから、素直に「ものにふれる」ことが出来るなら、きっと新しい発見があり、驚き、感心し本当の意味を知る喜びや深く知る興味をおぼえ、自分から進んで博物館に一步近づいてくれると思うのです。

（国友デザイン研究所 所長）

## 愛博協研修会に参加して

藤澤 良祐

先日は、いろいろとお世話になりました。大変勉強になりました。特に、国友デザイン研究所の国友氏の展示についての考え方、大変参考になりました。「見る人に感動を与えるような展示をしなければ意味がない」という言葉が一番印象に残っております。また、国友氏は、「人間個人個人では感じ方、考え方方が異なる」ということも強調されていたように記憶しております。

しかしこの2つの意見は矛盾するように思われます。すなわち、どういう人を対象にするかによって展示方法が変わってくると思います。例えば、普通一般の人を対象にした場合、パネル等の説明が多ければ多いほど親切な展示といえましょうが、反面、展示が煩雑となり展示効果—感動—が薄らぐことになるでしょう。また、国友氏の指摘のように自分が感動を受ける

ような展示であっても、他人が同様の感動を受けるとは限らないでしょう。

私は、展示にあたって一番大事なことは、見る人が感動を受けるか否かは別として、展示物そのものの中に存在すると思います。したがって、未来は、説明抜きの展示物のみの展示であっても見る人に感動を与えることができると思います。しかし、その展示物が何であるかわからない人、また、更にその物について詳しく知りたい人にはその手助けとして、パネル等の説明が当然必要であろうし、例えそれが煩雑となろうとも仕方ないように思います。そして、更にそれでも足らずもっと深く研究されたい方には、学芸員が説明したらよいのではないのでしょうか。

それで十分だと思いますが、いかがでしょうか。

(瀬戸市歴史民俗資料館 主事)

~~~~~

## 愛知県博物館協会への提案

岩田 正人

私が博物館に奉職するようになって以来、私につきまとめて離れない疑問があります。それは、博物館は何のためにあるか、というきわめて素朴な疑問なのですが、この疑問が終始私を悩ませるというところに、農業や工業などとは異なる博物館の特質があり、つまり、博物館は人間の生存にとって是非とも必要なもの、ということではないということでしょうか。博物館とは、つねにその存在理由が危機に曝されており、それゆえ、それを分明し確立すべく努力しつづけなければならないものである、ともいえます。

社会的な有用性という、この疑問に対しては、保存と社会教育という、博物館の社会的な機能乃至責務、が解答のための手がかりとして用意 — これを、これら二機能にしばることに対しては異論も多々あることでしょうが、それら予想される異論のうち、博物館における研究という機能についていえば、これを博物館特有のものとして高唱しうるや否や、また、研究それ自体が直接的に社会的な意味をもちうるや否や、には疑問がありましょう — されていますが、保存といった場合、一体何を何のために保存するのか、という疑問において、その権能を剥奪されてしまいます。いうのも、もっとも大雑把にいって、博物館が文化の守

護者たらんとしていること、を否定することはできないでしょうが、人間が関与する一切が文化事象であるかぎり、一本のマッチにすら明確に歴史的文化的意義があり、一切が保存の対象たりうるはずですが、しかし、宇宙船地球号をガラクタ置場とすることはできないことでしょうから。保存さるべきものについてのいかなる限定 — たとえば、この「何を、何のために」かを明晰に分節しているICOMの定義 — も、それが博物館に収蔵されたものの追認でしかないこと、をあきらかにしています。

保存されたものの妥当性は、つねに歴史的かつ事後的であり、保存対象に関する現在進行中の取捨選択には、決定的な基準がないとなれば、保存が個人なり、一時代なりのノスタルジー乃至信仰告白以上のものであることを、客観的に保証するものはないことになる可能性もあるわけです。しかるに、いまわれわれに必要なことは、自己満足以上の何かである、というわけです。

では、それは、社会教育的な役割のなかにあるのでしょうか。社会教育において、博物館が有する長所に、「涙なしの学習」ということがあり、この長所が、博物館利用の自発性と実物・実体験による学習、という特質にささえられていることは、周知のこととおもわれますが、この特質は両刃の剣であって、社会教育においてすら博物館を二義的なものとする弱点となっており、博物館の啓蒙的意義を断片的なものとしているのではないかでしょうか。つまり、博物館利用の自発性とは、年に2～3回の訪館のことであり、実物・実体験による学習とは、法則乃至概念的理解の形成に必要なはずの膨大なデータのうちの、わずか2～3のデータのインプットにすぎないということです。もっとも、実物・実体験による衝撃が学習意欲を昂揚する、という点はさて置いてのことですが。

もちろん、これは、博物館活動の変革によって克服されるはずの現実的な弱点であるにすぎません。さらに問題となるのは、ここで獲得される知識は一体何の役に立つのが、ということです。どう頑張ってみても、博物館が職業訓練所になるのは至難の業でしょうから、それは生産的な知識ではないでしょう。それは、『クイズおもしろゼミナール』でいわれる「楽しみとしての知」というほどのものではないでしょうか。博物館はヒマなひとがヒマツブシにゆくところであり、家族ぐるみで出かけるレクリエーション・センターでなければ、アメリカでいうSnobs onlyの場所。それに応じて、採算のとれる遊園地でなければ、私人や公共團

体の虚栄心を満足させる金看板でしかないのでないでしょうか。

そんなわけで、私の職場では家庭婦人層の来館者が増加傾向にあり、なおかつ、茶道具の展示には来館者が増加する、ということもあるのですが、このレクリエーション化、芸事への収斂、という傾向がゆきつくところまでいって、生産の荷い手たちからみむきもされなくなれば、博物館が社会教育において無意義である、ということになりましょう。ことに、中小の博物館が個々になしうることが、内容の体系性、受容の継続性、等々の点で、NHKの教養的番組の提出しうるところのものに比較して見劣りがする、ということになれば、なおさらです。

ところで、社会教育という観念を成立せしめている基本軸として学校教育があり、生産に対する密接な関係によって、こちらは一層その重要性を強調されてきてはいますが、知識の高度集約型産業化という現今生産形態の推移をみると、大学教育への負担は今後一層重くなつてゆかざるをえないようにおもわれます。しかし、現在すでに超過重負担となつてゐる大学教育にそれを求めるのは無理でしょうから、大学教養課程の一部を高校教育に肩替わりさせる、高校教育の一部を中学校教育に、以下同じ、という事態が生じてくるでしょう。このとき犠牲にされるものは、各人の生産能力には直接かかわりのないもの、つまり、人間的なものではないでしょうか。

この人間的なものなかでも、生産性に決定的に関与してくるものがあります。忠誠心とか、協調性とか、忍耐力とかいったもの、つまり団体形成能力といったらよいでしょうか。これらは生産効率の追求という面からみても無視できません。そんなわけで、これら団体形成能力的なものが主題化される場が必要となり、これが社会教育といわれる活動の中心となるでしょう。ボーイスカウト、ガールスカウト、スポーツ少年団、等々。つまり、社会的有用性という点からいって、傍流的であった社会教育の位置が、もっと中心的なものへと再編成される、ということです。

これは私の悲観的妄想でしょうか。行政サイドでは、すでに、一時流行したカルチャーセンターにかえてコミュニティセンターへの移行という構想が提出されており、私には、ことはすでに行政主導で動きはじめているようにおもわれます。かって、ナチス・ドイツや戦前の日本で大々的に設置されたという郷土博物館のごときイデオロギッシュな位置付けが、そのとき博物館に与えられていないという保障があるでしょうか。

博物館はつねに社会的な意義の確立を待望しているのだとすれば。

以上の様に予想される行政主導の社会教育再編構想に対して、それゆえ、われわれ自身の構想を明確に対置しなければならないでしょう。字面の同一性と心地よさの背後にありうるべき「時代の要請」なるものを、よくみきわめて対処する必要があります。

さきに述べた博物館の弱点中の弱点、非生産的な知識の伝達、という点を再検討しましょう。これまで、有用性ということを強調してきたのは、生存との接点をうしなつたものはいかにしても結局生命力をうしなつて頽廃してゆく、ということをおもったからであります。時代の推移自体が生存の空虚化にむかっているばかり、断片的知識を批判的知識へと、統合してゆくことが必要となってくるように思われます。この統合を通して、博物館をますます孤立してゆく諸個人の交流の場とする方策を追求すること。このような交流の形成には、自發的で、長期にわたる接触が必要でしょうが、自発性と継続的であることは、両立しえないというものではないでしょう。これの成否は、まずボランティアの創出にかかっているようにおもわれます。友の会活動とは、明確に異なる目的意識をもつて、この課題に取り組むべきときがきているのではないかでしょうか。

以上、きわめて支離滅裂、かつ、説明不足、かつ、単純な仮説を展開しましたが、物事が声高に語られるとき、それは危機にある、というのが真実ならば、「博物館の時代」といわれる現在は、それらが危殆に瀕している時代にちがいありません。つねに傍流的な位置におかれ、行政サイドにひきまわされてきた観なきにしもあらず、の博物館が脚光をあびるようなときには、一步しりぞき、むしろ、守るべき文化とは何か、を問いかえすぐらいの余裕が必要かとおもい、浅学の身も顧みず、おもいつくままに問題を提出してみました。

(財団法人 岩田洗心館管理人)

### 「愛知の博物館」№33

発行日 昭和58年3月

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489 愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

<0561> 84-7474